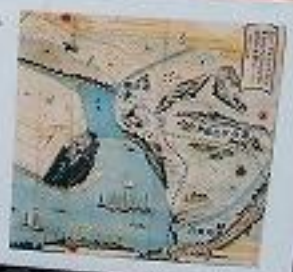
神奈川台関門跡

神奈川台の関門跡
沢渡中央公園
西区歴史街道
上台橋
不法投棄禁止

凡例
歴史資源
寺社
名木古木
古道
鉄道駅
公共公益施設
公園
N
0 250 500 1000m
西区
Nishi Ward
保土ケ谷区
Hodogaya Ward
神奈川区
Kanagawa Ward
みなとみらい駅
戸部駅
平沼橋駅
横浜駅
東京道
伊東海道

西区歴史街道

旧東海道



浅間神社入口

浅間神社と富士の人穴
創建は承暦4(1080)年、富士浅間神社の分霊を祭ったものと伝えられています。旧芝生村(しばうむら)鎮守、本殿のある丘は神ずり山と呼ばれ、昔は山の下がすぐ波打ち際であったといいます。境内西側の崖には富士山に通じていると伝えられる「富士の人穴(ひとあな)」と呼ばれる古代の横穴墓があり、東海道を往来する人々が見物する名所となっていました。しかし今は、周辺の開発によって見ることもできなくなってしまいました。

浅間神社と富士の人穴

浅間神社

賃貸管理
追分

帷子川(たまチャン)

相鉄天王町駅

帷子橋(江戸より8里)

雌子橋

歴史の道
旧中橋跡
今井川の改修
かつて今井川はここで宿場を横切っており、「中橋」が架けられていました。その川筋は慶安元年（1648年）に新しい保土ケ谷宿が建設された際に人工的に造られたものでした。しかし、その流路の構造から大雨のたびにここで水が溢り、しばしば下流域を浸水することになりましたが、なかなか改善されませんでした。
しかしながら幕末にいたって人馬の往来が急増してきたため、嘉永5年（1852年）宿場では改修費用100両を準備するとともに、町役人が200両の借用を代官へ願出し、認められるとただちに現在の川筋に改修されました。
保土ケ谷宿と品川台場建設
今井川改修で発生した多量の残土の処理に困った名主苅部清兵衛は、当時建設中だった品川台場（外国の侵入に備えた砲台）の埋め立て用の土として幕府へ献上することを申し出、3000立坪（約18,000㎥）あまりの土を船で品川に運び、この問題を解決したと伝えられています。
平成16年3月　保土ケ谷区役所
田中橋跡

歴史の道
旧東海道
旧帷子橋跡 800m
金沢横町道標 300m
本陣跡 500m

保土ケ谷宿商店街

金沢横町道標四基

金沢横町

国道一号線

保土ケ谷宿本陣跡
（1601～1870）
江戸時代に幕府が諸大名に参覲交代をさせるため東海道五十三次の宿場毎に本陣を置いたもの横浜開港東京遷都の頃まで存続した
1965
横浜市長 飛鳥田一雄記

保土ケ谷本陣跡

歴史の道

本陣跡

慶長6年(1601年)正月、東海道の伝馬制度を定めた徳川家康より「伝馬朱印状」が「ほとかや」(保土ケ谷町)あてに出されたことにより、保土ケ谷宿が成立しました。

東海道を往来する幕府の役人や参勤交代の大名は、宿場に設置された本陣に宿泊しました。保土ケ谷宿の本陣は、小田原北条氏の家臣苅部豊前守康則の子孫といわれる苅部家が代々つとめています。同家は、問屋・名主を兼ねるなど、保土ケ谷宿における最も有力な家で、安政6年(1859年)に横浜が開港する際、当時の当主清兵衛悦甫が総年寄に任ぜられ、初期の横浜町政に尽くしました。明治3年(1870年)に苅部姓に改称し、現在に至っています。

本陣が混雑した際、幕府の役人や参勤交代の大名は脇本陣に宿泊しました。保土ケ谷には藤屋・水屋・大金子屋の3軒の脇本陣がありました。

平成15年3月　保土ケ谷区役所

保土ヶ谷消防団
一分団本部
保土ヶ谷宿の宿泊・休憩施設
保土ヶ谷脇本陣跡

まちかど
博物館
松本陣跡

保土ヶ谷:旅籠屋跡

保土ヶ谷宿の松並木と一里塚

保土ヶ谷宿一里塚

保土ヶ谷宿の松並木と一里塚

権大坂

横浜市地域史跡

権太坂

平成十五年十一月四日　登録

この辺りは、権太坂と呼ばれる東海道を江戸から西へ向かう旅人がはじめて経験するきつい登り坂でした。

日本橋から四番目の宿場であった保土ヶ谷宿まではほぼ江戸内湾沿いの平坦地でしたが、宿の西にある元町橋を渡ったあたりより、長く続く険しい登り坂となります。

『新編武蔵風土記稿』に、名前の由来は、道ばたの老齢の農民に旅人が坂の名を聞いたところ、耳の遠いこの老人は自分の名を聞かれたと思い、「権太」と答えたため、とあります。また、坂の上から目の下に見える神奈川の海は大変美しかった、とあります。

旅人にとっては印象深い場所になり、浮世絵などにも描かれる保土ヶ谷宿の名所ともなりました。

東海道名所之内　権太坂
横浜市歴史博物館蔵

権太坂

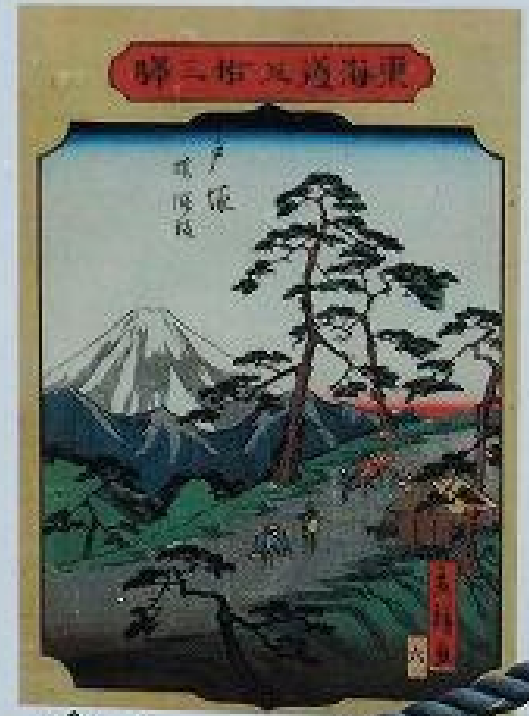
境木立場跡手前の屋敷門

歴史の道
境木立場跡
立場茶屋
宿場と宿場の間に、馬子や人足の休息のためなどに設けられたのが立場です。
中でもここ、境木の立場は陸大坂、焼餅坂、品濃坂と難所が続くなか、見晴ら
しの良い高台で西に富士、東に江戸湾を望む景観がすばらしく、旅人が必ず足
をとめる名所でした。また、茶屋で出す「辻汁粉」は境木立場の名物として広
く知られており、たいへん栄わったということです。「保土ケ谷区郷土史(昭和
13年刊)」によると、こうした境木の立場茶屋のなかでも特に茶林家には明治
中期まで黒塗りの高麗門や本陣さながらの構えの建物があったとされ、皇族方
の大名までもが利用していたと伝えられています。
平成16年3月
保土ケ谷区役所

境木立場跡

Soylution
境木立場跡

焼餅坂（やきもちざか）



●旧東海道・焼餅坂

旧東街道を戸塚方面に下るこの坂は「焼餅坂（別名：牡丹餅坂）」と呼ばれています。

武蔵国と相模国の国境にあたる権太坂と焼餅坂は、昔の旅人にとって日本橋を出発してから最初の難所でした。

このあたりには、一休する旅人を目当てにした茶屋が並んでおり、坂の脇らで焼餅を売っていた事がこの坂の名の由来だと言われています。

1960年頃の焼餅坂

2000年頃の焼餅坂

焼餅坂

品濃一里塚

慶長九年（一六〇四）徳川幕府は、五街道を整備し、あわせて宿場を設け、交通の円滑を図りました。

それと同時に、当時あいまいであった駄賃銭を決めるために、江戸日本橋を起点とした距離が判るように、明確な里程標が必要となりました。そのため街道の両側には、一里（約四キロメートル）ごとに五間（約九メートル）四方の塚が造られ、塚の上にはエノキやマツが植られました。これが一里塚です。

一里塚は、旅人にとって旅の進みぐあいがわかる目印であると同時に、塚の上に植えられた木は、夏には木陰をつくり、冬には寒風を防いでくれるため、旅人の格好の休憩場所にもなりました。そのため、一里塚やその付近には茶店ができ、立場が設けられるようになりました。

ここ品濃の一里塚は、日本橋から九番目の一里塚で、保土ケ谷宿と戸塚宿の間に位置しています。旧東海道をはさんでほぼ東西に二つの塚があり、地元では一里山と呼ばれていました。東の塚は平戸村内に、西の塚は品濃村内に位置し、西の塚にはエノキが植えられていたようです。

このように、今でも道の両側の塚がともにほぼ当時の形で残っている所は、神奈川県内でもこの一里塚だけであり、昭和四十一年には県の史跡に指定されました。

横浜市教育委員会

平成七年六月

品濃一里塚

旧東海道
戸塚宿
保土ケ谷
品濃一里塚

お店で焼いています
焼きたてパン
おかわり自由!
東海道戸塚宿見付跡
戸塚宿見付跡

東海道戸塚宿 澤邊本陣跡
明治天皇戸塚行幸碑
澤邊本陣跡

戸塚宿

歩行者専用
戸塚宿

おおさか
おおさか

原宿

お伊勢
平成二十五年
クスノキ
諏訪神社

鉄砲宿の松並木

鉄砲宿の松並木

一里塚跡
この辺りの道路両側の崖上
現在は何も残っていません
崖上の高さまであった旧東海道を復旧整備したものが現在の道路です。江戸時代には、街道の両側に盛土し植を
絶えた一里塚があって、旅程の目印とされていました。
一里塚跡

時宗総本山遊行寺